キリスト教神学
第2章　神学と哲学

一宮基督教研究所
安黒務

「キリスト教神学」
概略

1. 神を研究すること
2. 神を知ること
3. 神はどのような方か
4. 神は何をなされるか
5. 人間
6. 罪
7. キリストの人格
8. キリストのみわざ
9. 聖霊
10. 救い
11. 教会
12. 終末

第1部　神を研究すること
概略

1. 神学とは何か
2. 神学と哲学
3. 神学の方法
4. 神学と聖書の批評的研究
5. キリスト教のメッセージの今日化
6. 神学とその言語
7. ポストモダンと神学

序

1. 本章の目的
2. 本章の概容
3. 研究課題

第2章　神学と哲学
概略

1. 神学と哲学との関係についての諸類型
2. ２０世紀の哲学
   1. プラグマティズム
   2. 実存主義
   3. 分析哲学
   4. プロセス哲学
   5. 脱構築
3. 神学による哲学の活用

序論

1. 神学が最も影響を受けたもの
2. 哲学が枝分かれする以前

第1節　神学と哲学との関係についての諸類型

1. 哲学と神学は全く関係がない
   1. テルトゥリアヌス (AD160-230)
   2. 役に立つものは何もない
2. 哲学は神学を解明する
   - アウグスティヌス：プラトン哲学の採用
3. 哲学が神学を立証する
   - アクィナス：アリストテレス哲学の採用
4. 神学は哲学による評価にさらされる
   - 理神論
5. 哲学は神学に中身を与えさえする
   - ヘーゲル

第2節　20世紀の哲学
①プラグマティズム

1. アメリカ合衆国に最も影響を与えた哲学
   - ジョン･デューイ
2. ジョン･スチュアート･ミルの思想
   - 「形而上クラブ」…観念を明晰にする方法
3. 完全な真理など存在しない
4. 命題の経験できる結果
5. 「道具主義」
6. プラグマティズムの真実性と有効性
   1. 「効果がある」とは？
   2. 命題の変更
   3. 評価するための時間的長さとは？

第2節　２０世紀の哲学
②実存主義

1. 実存主義の先取り：キルケゴール
2. 本質よりも存在を優先する哲学
   1. 非合理主義の思想
   2. 個人が最も重要
   3. 人間の自由
      - 自由と責任は相互関係にある
   4. 主体性
3. ２０世紀の神学者が最も広く活用した哲学
4. 神学の実存主義化
5. 聖書的キリスト教と並行するモチーフ
6. 実存主義の不適切な点
   1. 強い情熱
   2. 主観主義
   3. 諸価値や倫理的判断

第2節　20世紀の哲学
③分析哲学

1. 言語の意味を突き止め、概念を明確化
2. 現代的な意味で分析：ラッセル、ムーア
3. 諸命題の明確化：ヴィトゲンシュタイン
4. 二つの主要な段階
   1. 「論理実証主義」
      1. 数学的真理・論理的真理、経験的真理
      2. 擬似命題、表出的言語
      3. 「理想言語哲学」
   2. 「日常言語哲学」「機能分析」
      - 言葉の誤用を避けさせる
5. 分析哲学における諸問題
   1. 記述的よりも規範的となる傾向
   2. さまざまな類型の言語を厳格に区別しすぎ
   3. 中立的な道具ではない
   4. 我々が満足できない領域の存在

第2節　20世紀の哲学
④プロセス哲学

1. 実在は変化するのか、不変なのか？
2. プロセス哲学は形而上学である
3. 神的実在は他のすべての実在と関係
4. 実在の基本単位を「瞬間」「機縁」と
5. 私は毎秒ごとに新しい実在である
6. 採用されるときは大きな衝撃
7. 変化とその結果生ずる善
8. プロセス哲学にも重大な問題が
    1. アイデンティティの基盤とは？
    2. 変化を評価する基盤は？
    3. 変化と不変の間に妥協点は？
    4. 「瞬間」「機縁」とはどれくらいの長さなのか？

第2節　20世紀の哲学
⑤脱構築

1. 脱構築はユニークな哲学
2. デリダはハイデガーのもとで学んだ
3. この区別が文芸批評に持ち込まれると
4. このことに呼応するのは言語理解である
5. 伝統的な論理を拒絶する
6. 「ロゴス中心主義」の拒否
7. 実在の基礎のパターンを発見･表現
8. 言語の抑圧的な用法を明らかにする
9. 広範囲にわたり、この議論は危機に瀕している
    1. 広く流通している論理が根拠の薄いものとしたら
    2. もしも脱構築に追従するなら
    3. ロゴス中心主義の欠陥を示すのみ
    4. 自分の理論によって生きていくことは困難

第3節　神学による哲学の活用
①神学の中身は哲学ではなく啓示による

1. キリスト教神学は明確な世界観
2. 神がくださった思考力を用いて
3. 実在についての自己の見解の要綱
   1. プラトン的：価値は客観的
   2. バークリー的：実在は精神的
   3. ヘーゲル的：実在は有機的
   4. ロッツェ的：実在は人格的
4. 類型により選択的に取り入れ可能
5. 提示されている世界観は客観主義
6. 真理を統一あるものとみている
7. 論理はすべての真理に適用できる

第3節　神学による哲学の活用
②哲学は「思索する」活動である

1. 批評能力を発展させる
   1. 概念についての理解を鋭敏にする
   2. 概念や前提を探し出すのに役立つ
      - より客観的になるのに役立つ
   3. 思想の含意をたどるのに役立つ
   4. 検証する必要性に気づかせてくれる
2. 完全あるいは正確な証拠を期待すべきでない
3. 批評するときは正当で客観的な基準を用いなければならない
4. 前提や体系を評価する基準については、宗教的言語の章で…